

※日本古代の「国」とは？

日本古代の「国」を、字引で探してみました。「ひとつの政府によって治められている地域」「古代から近世に至る行政単位のひとつ」「大化の改新の国郡制によって定められた」(三省堂：大辞林)、「ある一定の広がりを持った土地」「国家・国土・領土・領地」(三省堂：国語辞典)・・・などなど。どうもしっくりしませんが、“思うに”、現在の「県や町村」ぐらいの“群れ”と考えれば良いのではないで

しょうか。

※「倭国」は、それらが集合した状態？

古代においてわが国が、中国や朝鮮諸国から「倭」と呼ばれ、自らも「大倭国」などと称していました。「倭国」は7世紀中に姿を消し、代って「日本国」が成立したといわれています。7世紀の時点で、関東以西の日本列島に、倭国以外の国家が存在したことを証明することは出来ません。「倭」が「日本」の古称であるなら、何時、如何なる理由で国号が替えられたのでしょうか？

※冊封の呪縛からの脱却

720年に成立した日本書紀編纂の目的から考察してみましょう。

日本書紀が編纂されていた7世紀後半から8世紀初頭、東アジアは激動していました。大陸では隋が唐に交代。律令を基盤とした強力な冊封^註帝国の唐は領土拡大に邁進していました。朝鮮半島がその標的とされ、百濟、次いで高句麗が滅亡し、統一新羅の時代となりました。この嵐は当然倭国にもおよびました。白村江の敗戦から壬申の乱に至る波瀾万丈の時代を経て、新生日本となりました

た。

唐の張守節が著した「史記正義(736年)」に、「又倭国は、武皇后、改めて日本国と曰う」とあります。武皇后(則天武后)の統治時代に、倭国を改めて日本ということ宣言したのではないのでしょうか。また、30余年のブランクを置いた第八次遣唐使が「自らを日本人と名乗った際、言語も習俗も倭人そのものだが、国号は日本であり、古来大和朝廷の支配する国であった」という遣唐使に対して、唐の役人は「実を以て対(こた)へず」(旧唐書)、「情を以てせず」(新唐書)と記し、不信感をにじませたようです。

日本書紀は、その日本国の正史ですから、満身創痍の倭国の痕跡を残すことは出来ません。特に中国歴代王朝に対する朝貢外交の痕跡は除去されました。日本書紀に「卑弥呼や倭の五王」の記述がないのはそのためです。そして「歴代の中国王朝から冊封を受けたことがない」という日本国を誕生させたのです。国号の変更はひとへにかかって唐の冊封から逃れることでした。

※日本書紀は天皇の正当性を築いた

日本書紀の「神代の巻」(第一巻・第二巻)で語られている神話は、神々の系譜のかたちをとっています。一般的に「神」とは、時間を超越し、空間をも超越するはずですが、日本書紀の神々は「系譜」化して人間界になぞらえています。そうすることによって、神々と「天皇」が延長線上に繋がっているのです。

日本書紀は、7世紀末から8世紀初期、ちょうど日本国建国の時期に、日本建国を正当化し、天皇という世襲制の君主の正当性を裏付ける目的で編纂されたのです。つまり、日本書紀の神話は、日本天皇は、天から降りてきた神々の「正統な子孫」であると言っているのです。

※司馬遷が築いた「正統」の観念

「史記」の最初に置かれている「五帝本紀」。「五

帝」とは、黄帝に始まる五人の神話上の「天子」（皇帝の別称）となって、相次いで天下（世界）を統治した、となっています。司馬遷がここで「天下」と呼ぶ地域は、彼が仕えた前漢の武帝の支配が及んだ範囲のことで、現代人から見れば、天下は「中国」の同義語です。しかも黄帝の事跡として司馬遷が叙述した事柄は、全て現実の武帝の事跡と重複します。

神話の黄帝と現実の武帝とをつなぐものは「正統」という観念です。「正統」の歴史観では、どの時代の「天下」にも天命を受けた「天子（皇帝）」が必ず一人いて、その天子だけが天下を統一する権利を持っています。その「正統」は、五帝の時代には「禅譲」によって、賢い天子から賢い天子へと譲られました。

※史記の「国家」という観念

司馬遷が「史記」で書いていることは、「皇帝の正統の歴史」です。世界史でもないし、中国史でもありません。第一、司馬遷の時代には「中国」という観念も、「中国人」という観念もありませんでした。「史記」では、「天下」を「中国」と「蛮夷」という二つの地域に分けていますが、その「中国」は、前漢の帝都・長安がある陝西省の渭河の渓谷から、河南省・山東省の黄河の中～下流域へかけての、東西に細長い地帯だけです。

天命は、どんな時代でも天命だから、その天命を受けた正統の天子が治める天下には、時代ごとの変化があってはならない。もし変化があれば、それは天命に変動がある前兆になります。この理論の前提には「天変地異」があります。「天変地異」が起るのは、皇帝の「徳」に欠けるところがあり、天が皇帝に不満であることを示すと解釈されます。「徳」というのは、道徳でもないし、倫理でもありません。「徳」は「能力」であり、「エネルギー」です。「天変地異」は、皇帝の体に備わっているエネルギーが衰えた証拠であり、天下を統治せよと

いう天命を皇帝が果たし得ないことを暗示させる言葉です。

※「古代中国」が日本に有る

「神々から天子」、「神々から天皇」。この連続性は、偶然ではないでしょう。唐による冊封を避ける一方で、史記から学ぶ。日本という国は、「良いものは学ぶ」というのが伝統です。

最後に、ジャーナリストの中島恵さんのレポートをご紹介します。

「菅義偉官房長官による発表が行われたのは午前11時40分過ぎだったが、それから数分も経たないうちに、中国共産党機関紙「人民日報」でも「日本の新元号」に関する発表があった。中国の主要紙である「環球時報」などいくつもの媒体でも、同じような報道が続き、日本のメディアとほとんど変わらないほどの素早さだった。また、マスコミの報道を追いかける形で、個人がSNSに投稿する文章が目飛び込んできた」。

中国ではここ数年、「国学」への関心が以前よりも高まっている。日本では古くからこの分野の研究が進み、「論語」などに代表されるように、日本で出版されている中国古典のレベルは高く、また、日本社会にも「中国からやってきた文化」は知らず知らずのうちに浸透している。だが、“本家”の中国では、文化大革命などの影響で、これらの古典は長い間、軽んじられたり、日の目を見なかったりするような風潮があった。ここ数年、中国では経済的な成長と比例するように、人としての成長を求める動きがあり、その基盤となる古典ブームが巻き起こっている。“本家”としての自覚に目覚めつつあると感じるのだ。私は、「この傾向」を歓迎します。

(注)：冊封とは、称号・任命書・印章などの授受を媒介として、「天子」と近隣の諸国・諸民族の長が取り結ぶ名目的な君臣関係（宗属関係「宗主国」と「朝貢国」の関係）を伴う、外交関係の一種。